

日勤救急隊の取組事例

日中の救急需要

【救急出動件数】



- ◆令和4年、新型コロナウイルス感染症流行拡大に伴い、救急出動件数が激増
- ◆救急出動件数の内、**約6割を昼間時間帯(8～17時台)が占有**
- ◆**救急隊のひっ迫状態（高稼働率）も大部分が昼間時間帯に発生**



【昼間時間帯に運用する救急隊】

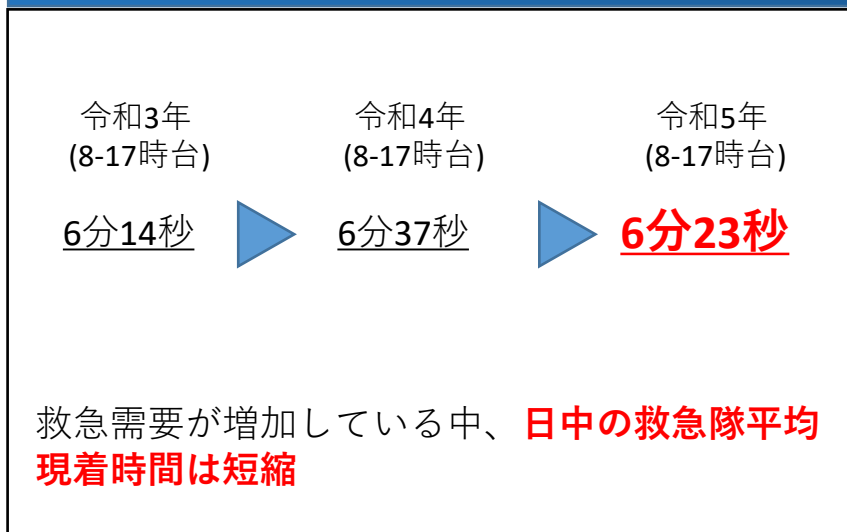
概要

増隊時期：令和5年4月
 運用時間：365日8:45～17:30（変則日勤）
 配置場所：本部機動部隊第一庁舎（本部第5救急隊）
 本部機動部隊第二庁舎（本部第6救急隊）
 特徴：救急需要に応じた「機動的な運用」を実施



増隊効果

【救急隊平均現場到着時間】



【救急隊稼働率状況】

※8-17時台に以下の稼働率に至った日数

	令和4年	令和5年
70%以上日数	93日	88日
80%以上日数	38日	24日
90%以上日数	6日	1日

救急需要が増加している中、**救急隊稼働率の上昇も改善。**

※救急隊稼働率：救急隊のうち、出動中（指令から再出動可能になるまでの間）の救急隊の割合

「機動的な運用」概要

現状と課題

- ☆時期や曜日などにより、需要が集中するエリアが変わる
- ☆救急隊稼働率において方面差が大きいことがある

機動的な配置変更

過去の出動実績(出動件数、到着時間、隊数)を基に一定期間配置先を変更

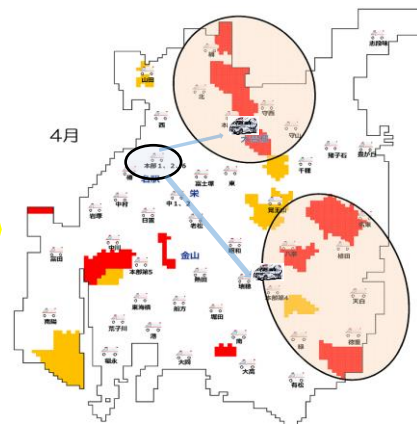
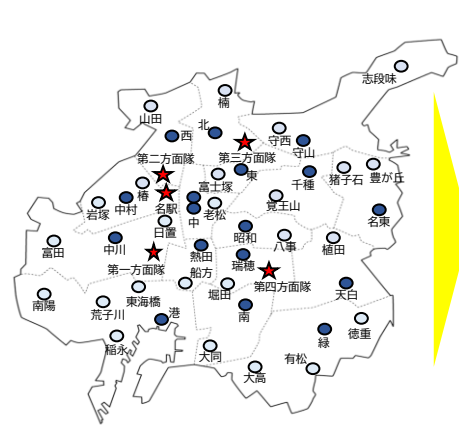
機動的なエリア移動

救急隊の稼働率を本部救急隊がスマホでモニタリングし、動態状況と合わせて空白エリアへ移動

機動的な配置変更

【計画的な配置】

例 昼間時間帯の出動状況(4月)
 ・指令から到着が6分を超える出動件数が多いエリアを抽出



名駅・栄エリアと比較して、大曽根エリアや覚王山・八事エリアの出動状況が厳しい

本部第6救急隊を特別消防隊第二方面隊から第三方面隊などに機動的な配置変更を行う

実績による出動状況を分析(状況が厳しいエリア)

- ◆ (休日)名駅・栄エリアや覚王山エリア
- ◆ (6月)金山・船方エリアや大曽根・覚王山エリア
- ◆ (10月)栄エリアや南東エリア(南・天白)

需要に合わせた機動的な配置を行う

機動的なエリア移動

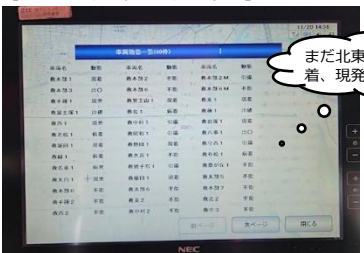
【スマホで稼働率のモニタリング】



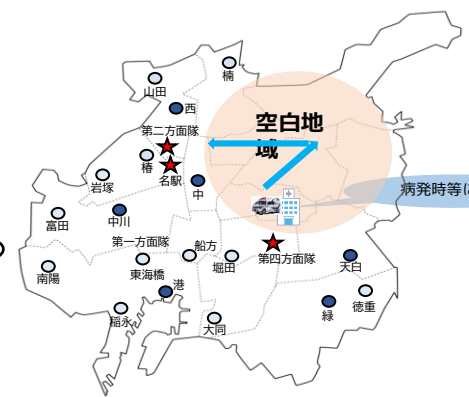
北東方面不足してる

【本部救急隊主導で移動】
 ※病院からの帰署ルート工夫するなど

【AVMで救急隊の動態確認】



まだ北東方面の隊は現着、現発ばかり



病発時等に確認

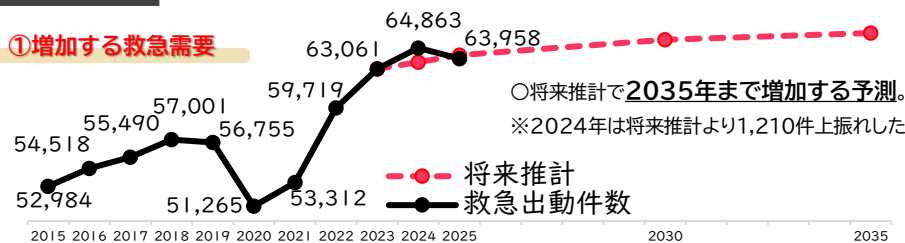
効果

- 救急隊稼働率上昇の抑制
- 救急出動件数の平準化
- 遠方出動の抑制
- 救急隊の現場到着時間短縮
- 迅速な救命処置体制の確保

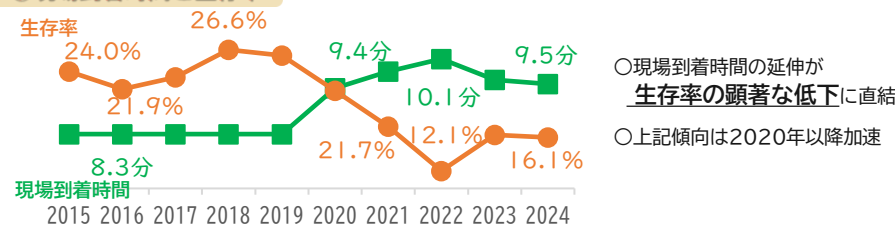
市民サービス向上

1 導入経緯

①増加する救急需要



②現場到着時間と生存率



③データによる分析 (日中の救急需要)

時間帯	出動件数	1時間あたりの出動件数
日中帯(9~17時)	29,870件	3,734件
夜間帯(17~9時)	34,088件	2,131件

約1.8倍

○夜間帯(17~9時)に対して、日中帯(9~17時)は救急出動が約1.8倍多い。
⇒日中帯のピークカットが必要

④人員増が難しいという組織の現状

○24時間対応の救急隊1隊を増隊するのに9人(3人×3班)の人員が必要
▶ 財政面、人事面から人員増は困難

上記、4項目等の課題を解決するための施策として

日勤救急隊を導入

2 概要

通常救急隊 23隊

日勤救急隊 2隊

通常型(4人編成)



兼務型(5人編成×3班)



3 運用と効果

通常型日勤救急隊

運用

- 勤務体制:平日日中の日勤勤務
- 配置人員:日勤勤務者4名
- 管内を中心に救急出動

効果

※平日日中の通常型が管轄地域での数値

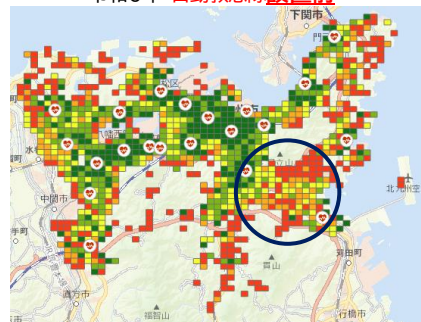
管轄地域の現場到着時間の短縮 ▶ 1分6秒の短縮を実現(9分52秒→8分46秒)

デイトタイム勤務者のさらなる活躍の場 ▶ 現在、**育児中の職員**がこの隊で活躍
今後、**定年延長職員**の活躍も期待



救急隊の現場到着時間を可視化 (平日日中)

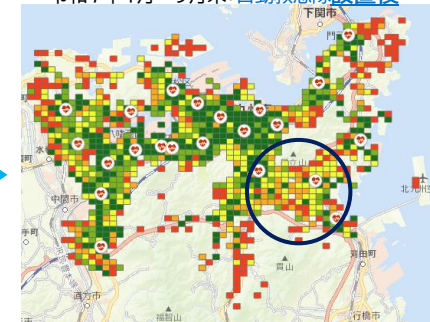
令和6年:日勤救急隊設置前



○赤いエリアの到着遅延が課題であった。

○通常型日勤救急隊導入後、赤色だった広範なエリアが黄色、緑色に変化しており、日勤救急隊の配置が現場到着時間を短縮したことが示される。

令和7年4月~9月末:日勤救急隊設置後



兼務型日勤救急隊

運用

- 勤務体制:24時間交替制の隊員が、日中の9時から17時は救急隊、17時以降は消防隊として活動
- 配置人員:交代制勤務者5名×3班
- 市内の転院搬送に限定して出動

効果

搬送への貢献

▶ 8ヶ月間で420件の転院搬送に出動(1日平均約2.5件)
平日日中の市内全転院搬送件数のうち、約25%を兼務型が一隊でカバー

消防リソースを最大限活用

▶ 人員を増やさず、救急隊の増隊を実現



①導入経緯

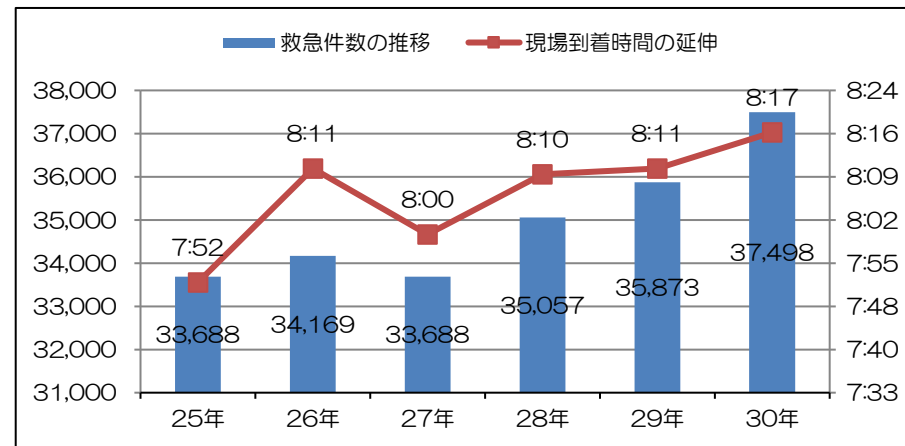
日勤救急隊創設以前、本市では、増加する救急需要に対応するため、救急多発時には、救急需要の多い地域へ出場していない救急車の移動配備や非常用救急車を活用した日勤職員による運用等に対応していました。しかし、非常用救急車を含む全ての救急車が出場してしまうケースが発生するなど、一時的に救急需要が集中してしまうことへの対応に苦慮していました。

そうした救急需要に対応するための救急隊(3名×3部制)の増隊は、職員定数の課題もあり、現在の配置人員で対応可能な「日勤救急隊」について、平成30年5月に構想(案)を作成し、同年6月にワーキンググループを立ち上げて具体的な検討を開始しました。

検討内容

はじめに、どの地域に救急隊を配置することがより効果的であるかという視点から、救急統計を基に分析を行いました。さらに、救急需要が集中する時間帯についても分析を進めました。その結果、市内で最も出場件数の多い相模原消防署本署救急隊(以下「相本署救急隊」という。)が管轄する地域に対応できた割合は約45.9%にとどまり、その他の救急隊が対応した割合の54.1%を下回っていることが判明しました。また、現場到着時間を比較すると、相本署救急隊の平均が約5.8分に対し、その他の救急隊の当該地域への現場到着時間の平均は約8.8分と3分長い結果となっていました(平成29年中)。さらに、午前8時30分から午後6時00分までの日中時間帯と夜間帯との比較では、日中の救急出場件数は夜間の約3.4倍で、救急多発状態も夜間と比べ3倍多く発生していました(平成30年中)。

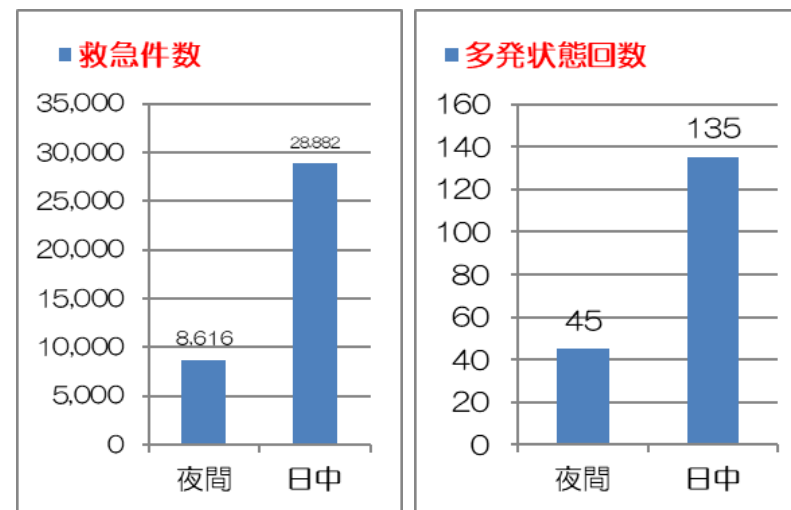
これらの検討結果から、相本署救急隊が所属する相模原消防署本署に日中の時間帯に特化した救急隊を増隊することにより、現場到着時間短縮などの面からも効果的であるとの結論に至りました。



●救急件数の増加
5年間で**3,810件増加**

●現場到着時間の延伸
5年間で**25秒延伸**

日中と夜間における救急状況 (平成30年中)



②日勤救急隊の概要

平成31年4月から相模原消防署本署に日勤救急隊を配置し、当直救急隊と合わせて2隊体制で運用を開始しました。運用した結果から、検討材料としていた管轄する地域に対応できた割合が50%を上回り、現場到着時間の短縮も認められたことから、令和2年4月からは、相本署救急隊の次に救急出場件数の多かった南消防署本署救急隊が所属する南消防署本署にも、2隊目の日勤救急隊を配置しました。

令和3年4月からは、増加する救急需要に的確に対応するため、職員定数を増員し、相模原消防署本署に配置していた日勤救急隊を当直救急隊に昇格しました。

現在では、南消防署本署に配置している日勤救急隊1隊を運用しています。構成は正規配置4名(うち部分休業職員の女性2名)で、全ての職員が救急救命士の資格を有し、うち1名は指導救命士です。

④日勤救急隊による効果

《メリット1》 多様な働き方

育児等の理由により24時間の交替制勤務ができない職員や、救急救命士の資格を有する高齢期職員(61歳以上の再任用職員等)でも、日勤時間帯に限定した働き方を選択できるため、救急救命士の資格を有する職員の活躍の場を広げることができます。これまで女性職員や高齢期職員の中には、長年、救急業務に従事してきた経験・知識を有効に活かしたいと思っても、24時間の交替制勤務は家庭の事情や体力的な面から難しいと考え、救急隊での勤務を断念した職員もいました。しかし、日勤救急隊では、24時間勤務に比べ、体力的な面で負担が軽減されるほか、限られた時間での運用であるため、メリハリを持って仕事に取り組み、ワークライフバランスの充実につなげることができます。

《メリット2》 教育

日勤救急隊に指導救命士やベテランである高齢期職員を配置することにより、育児休業取得後に職場復帰し、しばらく離れていた現場活動に不安を感じている職員への復帰支援や、当直部隊への知識・技術の伝承や人材育成ができることです。さらに、指導救命士等により、若手職員や救急救命士の資格取得予定者への直接的な指導ができるなど、その可能性は多岐にわたると感じています。

《メリット3》 市民の安心感

団塊世代の大量退職による職員の若返りが進む中、ベテランである高齢期職員は、長年培ってきた知識や経験により、多様化する市民のニーズに的確に対応できる存在として、市民に与える安心感は大きいと感じています。

参考【本市の救急隊数】 20隊

相模原市消防局資料

相模原消防署6隊、南消防署6隊(うち1隊日勤救急隊)
北消防署4隊、津久井消防署4隊

③日勤救急隊の運用方法等

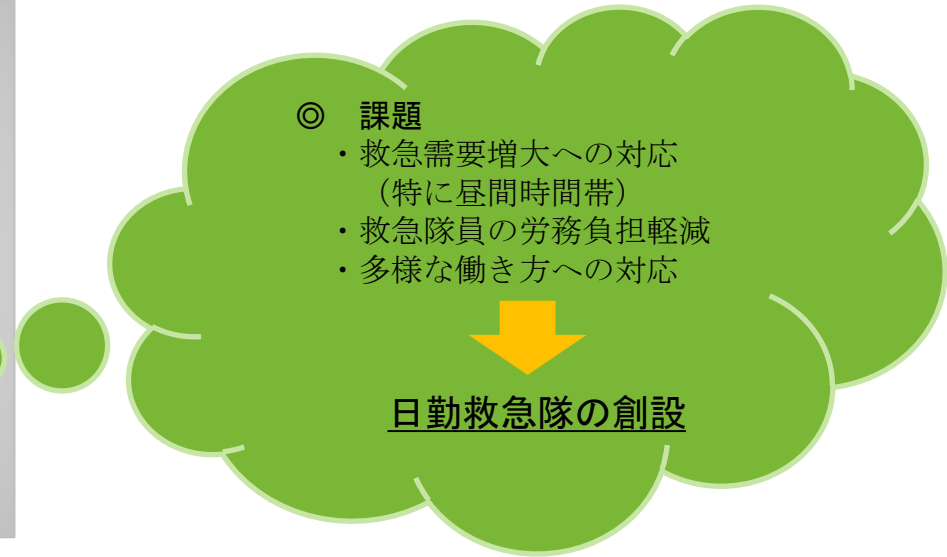
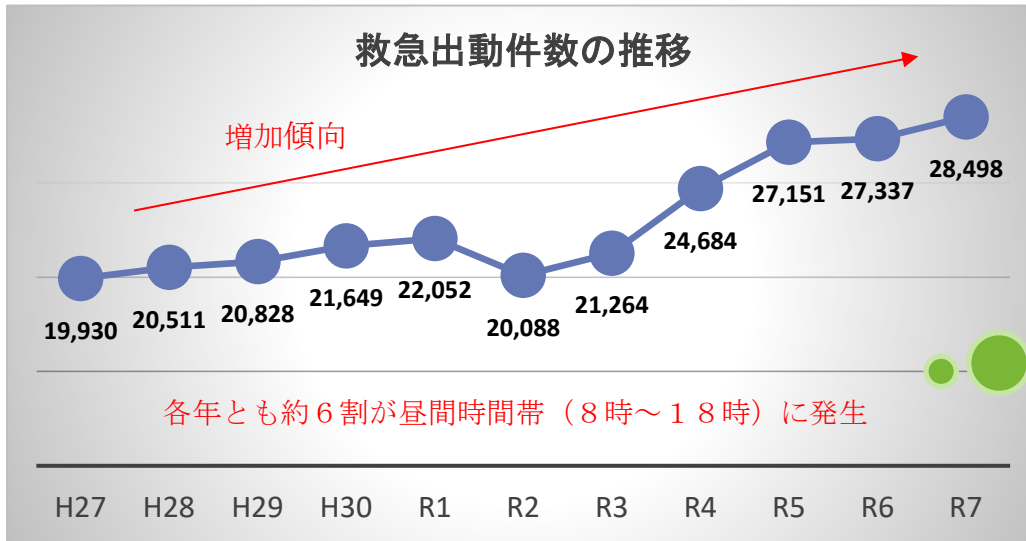
●運用方法

運用時間は、原則午前8時30分から午後5時15分までとし、当直部隊と交互に出場する体制としています。

●取組内容

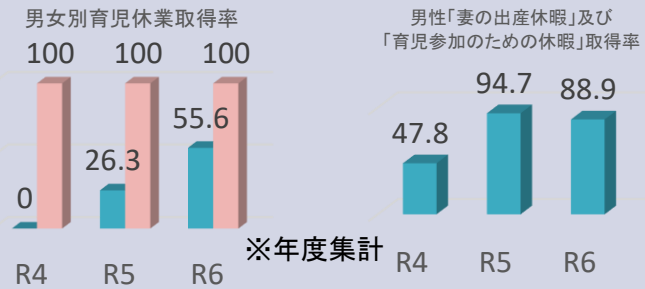
- 救急需要の高い平日の日中に対応
- 救急要請が一番多い場所に配置
- 育児中などで救急救命士資格者の働き方改革
- 指導救命士による直接的な指導

1 導入経緯

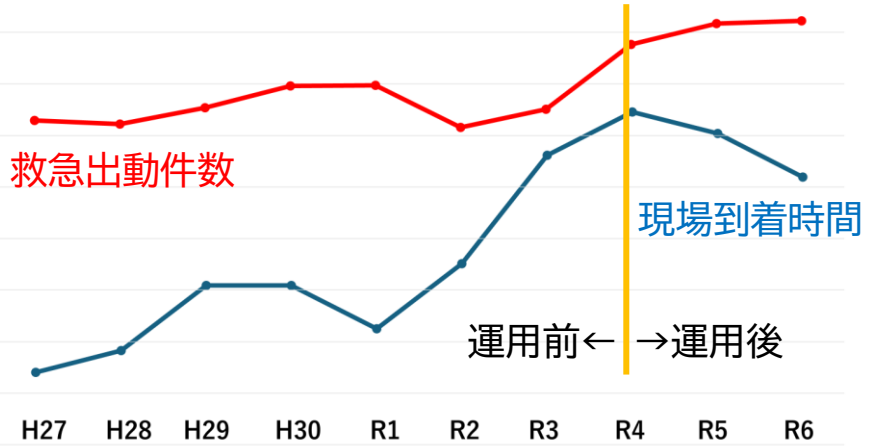


2 日勤救急隊の概要・効果

項目	内容	効果
救急隊数	2 隊（救急隊総数は 1 5 隊）	<ul style="list-style-type: none"> ・遠方救急隊の出動抑制 ・全救急隊の労務負担軽減 ・当直勤務が困難な職員も救急業務に従事できるようになり、効率的に救急体制を確保 ・育児休業等取得率の向上（下記グラフ参照）
配置場所	中央消防署（R 3. 4. 1～） 東消防署（R 7. 4. 1～）	
隊員構成	4 人（現職 1 人〔救命士〕 + 再任用 3 人）	
運用時間	平日午前 8 時 3 0 分から午後 5 時 1 5 分まで	
出動種別	全ての事故種別に出動	
出動件数（R 7）	中央日勤救急隊：7 2 4 件 東日勤救急隊：4 3 6 件	

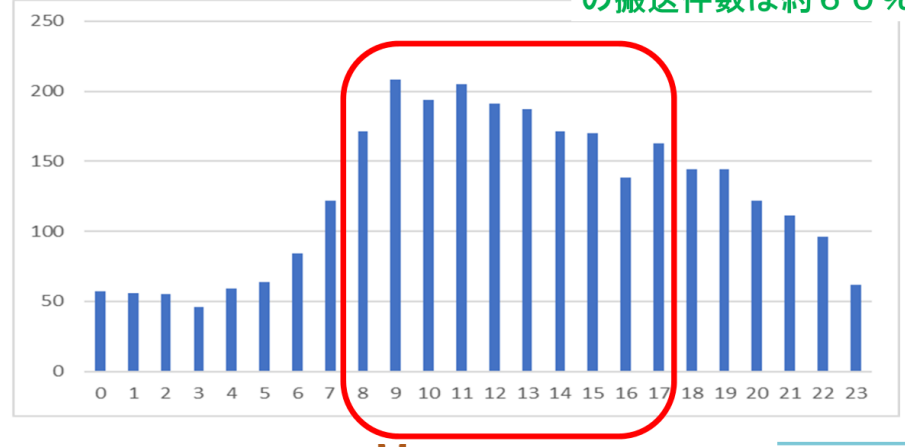


発足の経緯 その1



発足の経緯 その2

8時～17時の搬送件数は約60%



救急需要対策STEP 1

● 本部日勤救急隊

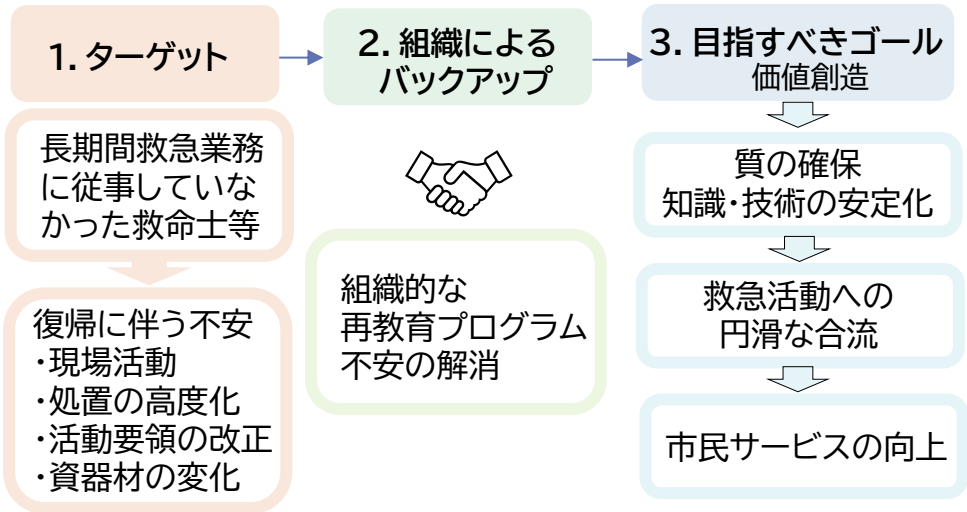
職場復帰・再任用職員

運用：平日日中(8:30～17:15)

4名運用・電動ストレッチャー装備

令和4年度
運用開始

リスタートプログラムの要旨




救急需要対策STEP 2

● 機動日勤救急隊

令和6年度
運用開始

需要予測により機動的配置

運用:平日日中(8:30~17:15)

 令和7年度から365日運用!

◆ ICTを活用した救急需要予測システム



日勤救急隊の効果

▶▶現場到着時間(平均)の短縮(日中時間帯)

令和4年度
8分47秒

令和5年度
8分40秒

令和6年度
8分22秒

令和7年度(12月末)
8分2秒

▶▶多様で柔軟な働き方の実現

育児休業復帰後の職員

- ・ワークライフバランスの充実した働き方を選択できることは非常にありがたい
- ・リスタートプログラムを実施したこと、現場ではベテランの再任用職員がカバーしてくれるので不安なく業務が遂行できている



再任用職員

- ・これまで培った経験を活かしていること、知識や技術を伝承できるなど非常にやりがいを感じている
- ・4名体制かつ電動ストレッチャーを使用しているので体力的な不安は少ない

